

宮崎汎会員が見た世界の旅第2部第12話

チェコの偉人たち

ある時チェコスロバキア人で名前を知っている人物を挙げてみよ、といわれて指折り数えるとチャフラフスカ・ザトペック・スメタナ・ドボルザーク・ドゥブチェク・ハベル・フスが頭に浮かんだ。チェコスロバキアを知ったきっかけは1964年東京オリンピックで華々しい活躍を見せたベラ・チャスラフスカとヘルシンキオリンピック（1952年）で大活躍したエミール・ザトペックであった。ザトペックは人間機関車と形容され、走りながら首を振り振り苦痛に顔をゆがめながら5km、1万m、マラソンと長距離全てで金メダルを手にした超人であった。一方チャスラフスカは体操競技で美しく華麗な演技で金メダルを獲得し“オリンピックの花”とうたわれ東京大会では絶大な人気を博した。

当時チェコスロバキアは共産主義政権下で、金属・機械・製鉄・兵器産業・ガラス産業など他国の追随を許さない技術立国であり優れた工業国であった。

1992年に訪れた時の国名は「チェコスロバキア」であったが、翌1993年に再訪した時にはチェコとスロバキアは分離独立し、国名は「チェコ」となっていた。国民は締め付けの激しい共産主義から脱却し自由を謳歌したいという大きなうねりのなかに常にあった。そして共産圏の一員であったチェコが、1989年ついに念願の民主革命を成し遂げ、自由な市場経済へ移行していたのである。記憶の糸を手繰ると当然政治がらみの話題が中心であったが、日本でもテレビでチェコスロバキアのビロード革命（大きな流血の惨事を回避した滑らかな革命の意）の映像が数多く放映された。この時をきっかけにチェコに関わる様々を少しは学んでみようという気になったものだ。同国がまだ共産主義陣営の一員であった時代、チェコスロバキアは民主化運動を象徴する文書である「2千語宣言」に多くの知識人や著名人が賛同し、ザトペック、チャフラフスカの両人とも署名した。その結果非常な苦難を背負わされることとなりザトペックは鉱山の掃除夫に追いやられた。チェコの民主化に関しては記憶に強く残る場面はいくつもある。1968年アレクサンデル・ドゥブチェク共産党第一書記が自由改革路線を推進しようとした時に、これを阻止するためソ連軍が戦車で侵攻してくる映像には、思わず歯ぎしりしながら手を握りしめたものである。失脚したドゥブチェク第一書記の後任はグスターフ・フサークで1989年まで大統領の任にあった。

チェコスロバキアはドゥブチェク失脚から20年を経た1989年、ビロード革命によりついに念願の民主化への扉が開き、人望の有るヴァーツラフ・ハヴェルが大統領に就任する。復権したドゥブチェクは連邦議会議長に就任し、集まった大群衆に向かいテラスから両手を広げ国民を抱擁する仕草を見せ大いに感動したものだ。またスポボダ元大統領も記憶の底にある。

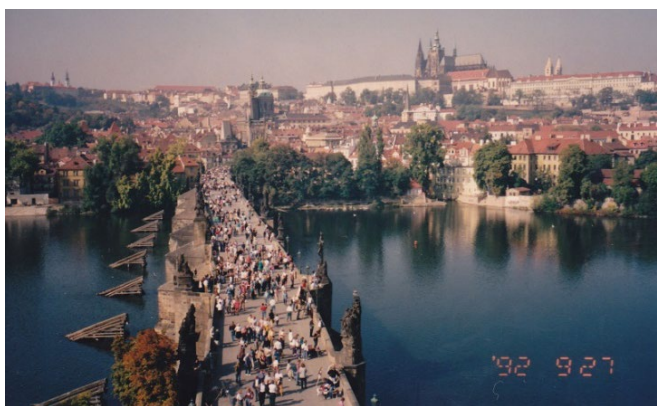


百塔の街プラハ



早朝の石畳のカレル橋

チェコの首都プラハは中世の面影を色濃く残す街である。市内をスメタナの「わが祖国」に謳われているモルダウ川の清流が流れ、そこには1357年に完成した中欧で最も古い橋として有名なカレル橋がかかり終日人で溢れている。またプラハは“百塔の街”と称されるほど尖頭の多いしっとりと落ち着いた街である。ビロード革命のときに市民でびっしり埋まったヴァーツラフ広場は今では平和な花壇のあるのどかなたたずまいを見せている。そして民主化に命を懸けた人たちへ手向けられる花束が絶えることはない。



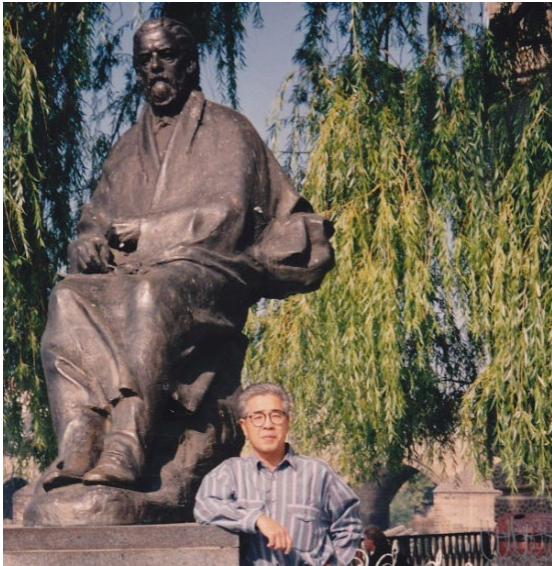
塔から見たモルダウ川にかかるカレル橋



モルダウの流れ



ヴァーツラフ広場の慰霊の花束



モルダウ川のほとりのスメタナの像

5月に開催される世界的に有名な「プラハの春国際音楽祭」の幕開けは、チェコの誇る作曲家スメタナの「わが祖国」が演奏されることから始まる。プラハ市内を貫くモルダウの流れは、ささやくようなせせらぎから徐々に流れに勢いが加わるような情景を彷彿とさせる。

モルダウ川はチェコの母なる川である。川辺の大きな柳の木の下に険しい表情をしたスメタナの座像がある。

ベドルジバ・スメタナ（1824年～1884年）は、ボヘミア北部のリトミシュルに生まれた。幼少のころからバイオリンやピアノを習い、優れた音楽的な才能の片鱗を見せていた。当時、同国はオーストリア帝国でド

イツ語が公用語であった。スメタナは1839年プラハへ移り本格的な音楽家への道を目指す。この頃従兄弟のルイサに恋愛し、彼の初期の作曲である「ルイサのポルカ」を残している。

1844年プラハ音楽大学で音楽理論と作曲に関する本格的な教育を受ける。1848年ハプスブルグ家の専制支配に抵抗して、スメタナもプラハに起こった民主化運動に共鳴し寄せてくる軍隊に対しプラハのカレル橋にバリケードを築く作業に従事するも鎮圧されてしまう。この頃スメタナは行進曲「自由の歌」を作曲した。

1848年頃スメタナはフランツ・リストに手紙を書いている。作曲したピアノ曲を出版するため出版社へ推薦してもらいたいということと、自分が始める音楽学校開校への資金援助であったが、リストの返事は、推薦は了解したが借金は断った。スメタナの開校した音楽学校は高い評価を得て成功した。1848年カテシナと結婚し4人の娘を授かる。1850年プラハ城の常任宮廷ピアニストに遇せられ作曲家活動に没入する。1859年妻のカテシナ死去、娘も3人失い不幸のどん底を味わう。スウェーデンのヨーテボリに6年間滞在する。1860年再婚する。翌61年スウェーデン王家から招かれピアノ演奏をするなどこの頃のスメタナの活動は極めて旺盛であった。

チェコでは国民の間からチェコ語のオペラを望む声上がり、スメタナはチェコ語を勉強し習熟してオペラの基礎を築く。作曲した“ボヘミアにおけるブランデンブルクの人々”が大当たりする。

だが好事魔多し1874年晩年を迎えて病で耳が聞こえなくなった。耳が聞こえなくなってからの作曲はベートーベンもそうであったが、スメタナも代表作である「わが祖国」の作曲に取り掛かり

1879年に完成させた。スメタナはチェコ国民から大きな拍手をもらい大音楽家の地歩を固めた。1884年60歳を迎えると更なる不幸が押し寄せてくる。記憶喪失がはじまり次いで精神錯乱状態であついに入院を余儀なくされ、1884年5月12日他界した。

ドヴォルザーク

アントニン・ドヴォルザーク（1841年9月8日～1904年5月1日）作曲家。プラハの近くで生まれ生家は肉屋であった。幼少のころからバイオリンの手ほどきを受けるなど音楽的な才能を開花させていた。1857年プラハのオルガン学校で学び卒業後、指揮者であるスメタナのいるオーケストラでヴィオラ奏者として活動しスメタナから指導を受けた。

1878年ブラームスに出会い親交が始まる。ブラームスのハンガリア舞曲に刺激を受け、ドヴォルザークは「スラブ舞曲」を作曲するなど人気作曲家となっていく。ブラームス等の支援もあり、民族主義的な作曲家として国内外で人気を博していく、とりわけドイツとイギリスにおいてはドヴォルザークの人気は高く1891年にはケンブリッジ大学からは博士号を授与されるなど生涯を通してイギリスへは何度も足を運んでいる。1891年にアメリカのニューヨークナショナル音學院の創立者から音楽院長就任を打診してきて、翌1892年ニューヨークに到着し、音楽院長として音楽教育に携わることとなった。

よく知られている交響曲第9番（新世界より）は1893年1月に着手し5月に完成する。

1895年4月アメリカを去り、故郷チェコへ戻りプラハ音楽院で再び教鞭をとり作曲活動も再開する。イギリスはこれまでもドヴォルザークに高い評価を与えてきたが、9回目のイギリス訪問を果たした。故郷チェコはイギリスから帰国したドヴォルザークに多くの名誉と栄誉を与えた。チェコにおいてのドヴォルザークは、スメタナに続く作曲家として国民の間では人気が高く好感を持ってたたえられている。1904年5月に持病が悪化し、脳溢血で62歳の生涯を終えた。葬儀は国葬をもって偉大な音楽家に報いた。因みに交響曲第9番第2楽章は、日本でも「家路」として日本語の歌詞がつけられ広く親しまれている。ドヴォルザークは鉄道ファンとしても知られている。



モーツアルトの使った楽器

ところで1787年楽聖モーツアルトはプラハに滞在し、ドンジョバンニを作曲した。市内にはモーツアルト博物館があり、そこには彼のゆかりの品々が保存されている。ドンジョバンニの作曲に使用したハーブシコードや自筆の楽譜が展示されていて音楽ファンには欠かせないスポットになっている。余談であるがチェコの労働大臣を務めた方が来日し土産にモーツアルトを記念する小冊子を頂戴したことを思い出し過ぎた日々を追想した。1992年